特54
21

明治十八年十月廿一日内務省聽付

第壹番目大名題

百萬石實入金澤

淨瑠璃名題

神祀稲聲花

常磐津れん中

序幕
白山明神社内の場
多賀家奥御殿の場
同蘇鉄間加增の場

貳幕目
浦井主膳屋敷の場

三幕目
中老政尾部屋の場
同多賀家奥庭の場

四幕目
大月藏人屋敷の場
鴉川土手闇討の場
同鴉川下網船の場

五幕目
大乘寺法會の場
同大乘寺客殿の場

六幕目
筑摩川乘切の場

七幕目
錦山紅葉遊覽の場
大月藏人下屋敷の場

八幕目
多賀家詮義の場

大詰
三上山簑牢の場
同返し
湯島天神祭禮の場

役割

多賀大領義則　民谷宗七郎
老臣小田次炊　浦井左源太
男達上野ノ鐘五郎　時蔵　鴉ノ者鬼鳥ノ吉　鬼丸
中老政　野田永太郎
藏人の妻おとる　紫若　安宅郷右衛門　市藏
男達不忍ノ弁吉　鳥屋萬助
男達根津の八重藏
大領の妾お貞の方　きらか　唐澤四郎兵衛
手子舞お秀　幸藏　久松三五郎
家老職大月藏人　中澤甚平　時十郎
男達湯島ノ三吉　我當　吉良助太郎　璃久三郎
又助一子又市　種太郎　涙人源見十藏
中老玉笹　大三郎　大月の伯父　冠十郎
百姓大六
若徒會平治　左枝主馬　主膳の娘お波　鳥屋萬助娘お雛　國之助
若イ者頭又藏　又一吉　手子舞のお富
中老紅梅　祭リッ子若松ノ鶴吉　鶴松
乳母おさゞ　三ッ之助　同　銀杏ノ萬吉　萬摩呂
坂東三彌吉　浦井主膳
横田鎌齋　鳥井又助　左枝左渡守　春三郎
道具屋金兵衛　時五郎　男達根岸ノ松右衛門

但し筋書之儀ハ表面の役割と御引合之上御願可被成下候以上

○序幕本舞臺都て白山明神社内の体此場の筋い仕丁三人居て箒を持掃除を仕て居る所へ神主出て(神)最早多賀家の若殿さまが御家長久を祈りの爲當社へ御參詣ある筈なれば何かの用意致せといふゆへみな〳〵附て這入るト直に向ふより多賀家の中老紅梅若との金二郎の手を引出る跡より悪ごし元六人附添へ出る此跡より吉良助太郎上と下も大小にて手役慶之助の手を取り出て來るとな〳〵花道にていつもの鏡山のよふあせりふあつて(助)若殿よいイザまづ設けのせきへトみな〳〵舞臺へ來り金二郎を床に腰かけさせるゆへ慶之介もおあじく腰をかけよふとするを紅梅留めて(紅)あなたは御家來ぶんゆへ爰へおかけ被成れては悪う厶り升るト扣へる是い八年以前大領の妾お菊お貞といへるもの同じ年に妊娠して同じ月に出産あしお貞は二月五日よ慶之助を産を又同じ月の七日にお菊は金二郎を産落せしゆへ全く金二郎い三男慶之助は二男の筈なれど金二郎は鎌倉より誕生せしゆへ直よ將軍へ届けをなし兄と敬ひ慶之助い國元より出生せしゆへ三男極め大領は金二郎と若殿と呼せ慶之助をば家來分とあして取扱はせるなり助太郎は此事からを申上る(助)御幼年ゆへおい〳〵此事を申上る心得の所今日はからず紅梅どの、仰せにて恐を入升たと詫る(金)その義い承知致せしが邸内にてい格別爰よてい矢張此床へト金二郎慶之介を我傍へ腰を掛させよふとする慶之介辭退して(慶)それでは父上のお詞にろひき升ればトいふゆへみな〳〵感心するところへ以前の神主出て來り(神)ハッ最早祈念の時刻なれば御神前へ御參詣あれトいふ是よてみあ〳〵鳥居の内へ這入る跡見送つて助太郎慶之介を褒めて(助)御氣の毒なる慶之介さま同じ殿のお胤思ばおあじ御妾腹順を申さばあなたさまが御世繼あれど國鎌倉の爲だてゆへハテ悔て返らぬ事あから殘念よ厶り升うアヽどふか和子を世に出したいものだあアト無念のこなし此仕組にて道具替る

○本舞臺都而多賀家御殿の体此場の筋は中澤甚平その外詰合の諸士大勢詰て居て(甚)最早午飯の時刻なれバはやく御膳を我君へ差上よト甚平頻りよ急ぐゆへ膳番野田永太郎毒味役唐津四郎兵衛配膳役民谷宗七郎の三人が膳部を持出て(三人)ドレ膳部を我君へ差上んト三人膳部を持行うとするところへ(大)アイヤ其御膳ちがらくト聲をかけて襖の内より大月源藏出て(大)いまだ御膳の檢分致さねど拙者得と檢分の上(三人)アイヤ最早檢分鬼役も我々三人りよて致せしなりトいへど大月聞入れず(大)イヤ念よは念を入れろといふ事あれば是非今一應改ためたし(三人)差程御疑念あらバ是非もなしイザ御檢分(大)ヲヽト大月件の膳を改むる事あつて(大)ハテ心得ぬどふも汁の碗中に毒氣あるようしト大月いふゆへ三人いらだち(三人)さからは今一應毒味致さんと各々件の汁碗を取つて吸つて三人忽ち毒氣に當つて苦しむ甚平是を見て驚き料理かた松島新八宮原勘獄を呼び出し吟味あしトゞ此事を重役衆蒲井主膳へお知らせ申さんト立とふトする折から(蒲)アイヤお出に及ばぬ蒲井主膳お次におゐて承り升たト聲をかけ襖を明て蒲井主膳出て來り此場の体を不審に思ひ且三人の忠臣が毒よ當つて死するを憐れむ(蒲)さかしあから殿へ午飯の延引を申あげんト奥へ這入る後にて甚平は松島と宮原を引立る両人口惜しがる諸士みな〳〵此騒動を大きくいふを大月扣へて此仕組にて道具替る

○本舞臺都而多賀家蘇鉄の間の体爰よ多賀の大領并に以前の主膳諸士大勢住ひ居て(領)今日上巳の祝義として白山明神へ金三郎を參詣に遣わしたる祈念の札を納めさせに(蒲)ハッ神の威德は實よ有難し君よは今日危き一命をお拾ひ遊ばせしと膳部に毒あつたを語り(蒲)夫ゆへ午飯延引致しまして厶り升る(領)エヽシテ誰が其毒を見出せしゾ(蒲)大月源藏が見出し升た(領)彼れは先年白山明神祭典の節家來の者共が口論をせし事ありしが我其處へ駈付て鎮靜の後歸る折から持病起り持藥に用ゆる紫雪圓呑

んとせしよ有合さず申附糸ど彼の長源(大月源藏の前名)藥の壺を持つて駈付しゆへ其時より五十石加増あし源藏と改名させ近習とあせしに又候今日の大功賞すべし是へ呼べト源藏を呼出し大領喜悦よて(領)五百石加増するといふ源藏は態と辭退して(大)思召しい添なけれど元より賤しき足輕長次兵衛が悴斯くお取立に相成りしさへ難有きに又候御加増有ッてい傍輩の手前もいかゞト憚る氣色ゆへ(領)いかさま其身の下賤ゆへ登庸さるゝを遠慮もあらんがまからば今より大月藏人と改めさせん(大)君の御意奉戴仕る(領)此上主膳が娘浪を藏人へ娶合せん(大)重ね〳〵の君の御高恩(領)コリヤ主膳其方は不承知か(蒲)委細承知仕り升た(領)ヲヽさやうか予もよろこばしひわいト此仕組にて幕

○武幕目本舞臺都而浦井主膳住居の体此場の筋は名島瀧右衛門川村慶次三月節句の祝義に來り主膳が在宿と尋ねて居る主膳の悴(左源太)三月上巳の祝義は御同樣ながら今日御殿よて薬の變事それゆへ親主膳今に歸宅致し升せぬトいふゆへ両人は是を聞そこ〳〵にして歸る爰へ主膳若徒曾平次出て來り左源太曾平次御殿の樣子を氣遣ふ仕打にて今日の變事を尋ねる主膳御殿の事どもを語り野田唐澤民谷の横死を歎き且娘お浪を大月へ嫁入りさせよとの君命ありと語る當惑せる折から隣家へ雛を見に行きし娘お浪乳母おさゞ歸り來て樣子立聞ハット驚ろく此内主膳は曾平次よお浪を隣へ迎ひよ行ト云付るゆへ曾平治迷惑ながら行かんとしてお浪と顔見合せて一寸呻吟三人そつと下手へ這入る主膳仕打あつて奥へ這入る爰へ吉良助太郎大月よりの贈りし結納の勝男節家内喜樽を釣臺に乗せ持て出て來て案内を頼む左源太出迎ふ助太郎左源太よ大月より結納を渡し受取を頼ひゆへ左源太ふせう〳〵よ挨拶するところへ主膳出て挨拶をして結納目録受取書を助太郎に渡しはやく歸れといふに助太郎手持不沙汰でおかしみせりふあつて據なく家來を連れて這入る跡にて主膳思案をして居るところへお浪おさゞ出て來るゆへ呼びとめて殿よりの仰せにて大月方へ嫁入りの祝宴を言渡すお浪はどふあつても大月へ縁付事はいやじやといふゆへ左源太もとも〳〵妹に婚姻をすゝむ(浪)此嫁入りを拒みまするい言替した男が厶り升るゆへトいふゆへ一同驚き(蒲)言替せし密夫の名を我に包まず申せトいふところへ(曾平治)その不義の相手い私しで御座るト曾平治出て來りお浪曾平治両人主人親の手よ懲らふといふゆへ主膳は貳人りの深き心をさつし遣り此場を落よと呑込せる殊更曾平治は乳母さゞが悴なれバ一ト入不便なりと歎く聞てお浪は手早く父の差図へを拔て自害をする曾平治も手早く刀を拔き腹へ突立て(曾)大月へ娘入あつては浦井の家の恥辱ゆへとさつしそれゆへ態と此自殺トいふ此時小田大炊出て來り(小)両人が不義の証據い(曾)お浪さまといい合せ認め置し此艶書ト出すを小田見てかんと(小)せめて是ある両人を二世の夫婦に(蒲)イヤ手前も左樣存ぜるト上手の障子家体の内に飾りし雛の道具にて祝宴の盃をさせお浪曾平治の首を切落し(小)手前は御殿へ首級をもつて申わけ(蒲)御前よしなにト此仕組にて幕

○三幕目本舞臺都て多賀家政尾部屋廊下の体此場の筋い奥女中六人夜詰廻りの心にて出て(六人)此程毒薬の一件より此方時替りに懐剣を持廻りしが今宵も何事も厶り升せぬ(政尾)四ッ時より我預りみなさんは御休息ト六人這入る(政)我親笠原武右衛門が弟子大月藏人が今宵忍んで我部屋へ來る筈なれどト待はびしとところへ大月藏人忍び來り(大)それがしへ密よ逢いんとい、送られしが何事でム(政)そのお願み申お方はト障子を明て忍ばせ置さしお貞の方を出し取り持つて両人を障子の内へ忍ばせ入れ政尾いほつと思ひ入此件よて道具廻る

○本舞臺都て多賀家奥庭の体此場の筋は伊賀流の忍の術を得たる深見十藏忍び入り大殿を藏人にたのまれ害せんと御殿の床下へ忍ばんと伺ひ居たるところへ久松三五郎

忍び廻りの形よて出て來り十藏を見咎め捕へんとするに十藏呪文を唱へ術にて遁れて退入る後よ落しある手紙に心付き拾ひ見に浦井主膳の手紙ゆへ驚ろくところへ家來伴平出て提灯を差出そ三五郎わざと打落し此件よて道具廻る

○本舞臺都而元ろ政尾の部屋の道具に戻る此場の筋は明方政尾人目をかね藏人をせき立るお貞藏人名殘りを惜む政尾人目に憑らばあしからんと氣をもむ藏人思ひきつて橋掛りへは入る此道具だん〳〵廻つて廊下を見せる仕かけよて杉戸の外へお貞出て思ひず向ふを見る此時中老玉笹向ふより出て來り(玉)正しく男と女のけばいトなやしそながら舞臺へ來るゆへお貞かくれる跡に簪の落しあるを玉笹拾ひ取り思ひず(玉)政尾ト顔を見合せ氣味合よて幕

○四幕目本舞臺都而大月藏人新屋敷の体此場の筋ば名島瀧右衛門川村慶治大月邸の庭を見物よ來たる体野田八郎

治に案内をされし禮をのべて歸る此時向ふ小田大炊瓢を持出て來り(小)茶坊主上りの源蔵の藏人めトいやみを云乍ら玄關へ來て(小)いつもながら是なる瓢へ御酒無心よ參つたト此時奥より高木淺右衛門出て(淺)主人藏人ハ今日ば留守にてムる(小)イヤ只今鳥川から見たるところ内に居るには違ひないトいふゆへ淺右衛門もてあまして居る所へ藏人も是非なく出て(大)只今裏門から歸りましたンテ御酒ぞ御入用とあらば後刻一ト樽持せて上げんといへば(小)それには及ばぬ此瓢へすこしづゝ貰ふがこつちの勝手ト瓢箪を出すゆへ淺右衛門受取つて酒をつめに這入る爰へ道具屋の金兵衛かねて大月へうつた津田祐廣の銘ある鎗の身の研が出來しを持て來る大月此鎗を見て居る内淺右衛門酒を詰めて瓢箪を持ち出して渡そゆへ(小)おれは此酒を持つて是から鳥川へ漁に行つもりだトいゝながら別れて小田大炊這入る金兵衛も金を受取り這入るとあ〳〵も奥へ這入る爰へ大月が伯父百姓大六出て來り案内して(大六)ハイ〳〵わしは藏人どのよあ見して下さいトいふゆへ以前の八郎治出て來り只の百姓と思ふゆへ不禮を咎め小言を云處ろへ安宅郷右衛門出て(郷)コレ〳〵八郎治どのお待被成れコレい〳〵大六さまよくてそお出ト應接して奥へつれて行うとするを八郎治咎めるゆへ(郷)こは主人藏人さまの伯父さまでムるト聞て八郎治恟りして閉口して居るを大六笑ふ件にて此道具廻る

○本舞臺都而藏人内廣間の体此場の筋い藏人伯父大六に馳走を任やうとすれど大六聞入れず藏人の親長次兵衛の位牌を出しいろ〳〵と意見をして諌める若し聞入れずばト懇ろより鎌を出して詰めよるゆへ藏人態と悔悟した風をして(大)ソヲヤ御尤なる伯父御の諌め是より御意見にもどつき急度心をひるがへし申さんトいふを大六聞て悦び(大六)それ聞いてわしも安堵ト悦ひながら暇をつげて大六這入る跡にて大六があつてい大望の邪魔ゆへ殺そふ

と郷右衛門がいふを獵人同意して(大)添なき貴殿の寸志然らば跡より追かけて(郷)承知仕るト鎗を持郷右衛門追かけ退入る爰へ獵人の女房おてる出て來り(てる)親共主馬參を升ればあなたさまは奥へト獵人を伴ふ此もやうにて道具廻る

○本舞臺都而鳴川堤の体此場の筋ハ以前の大六休み居るところへ郷右衛門出て後より突く是より大六手負乍立廻りよ成るトゞ大六を切倒し死骸と位牌を鳴川へ投入れて仕打にて此道具廻る

○本舞臺都而鳴川下流の体此場の筋ハ小田大炊舟にて網を打ッて居る網よ位牌が引かゝつて上るもへ大炊月にすかして見るよ(小)俗名長次兵衛ハテ心得ぬト不審乍又網を打今度ハ大六が死骸が引懸つて上る是は郷右衛門が川上なる鳴川堤よて大六を首尾よく殺して死骸水中へ投入れしなり是を舟頭見て恟ぴする小田ハ扨ハと心付きし件よて此道具廻る

○本舞臺都而元の大月邸の体此場の筋は獵人郷右衛門の首尾いかゞト待つて居るところへ郷右衛門歸り來たつて(郷)大六を首尾よく討果せしトいふ獵人是を賞して(大)最早身内障りあく我大望も(郷)イヤ御安泰よムりまそる(大)是と申もその方が今よはじめぬ手柄此末ともにト此樣子を主馬一ト間の内にて聞しをしらぬ体よして出て來り獵人に暇を告て立歸る跡よておてる親の主馬がいゝ付よて夫ト獵人を諌めるところへ小田大炊出來り酒に醉しふりしてヅカ〳〵内へ退入る(小)源獵の獵人今宵鳴川の得物トいゝあがら以前の大六が持來りし位牌を出して見せるゆへ郷右衛門恟りして氣色をかへ大炊よ切掛るを獵人留る是を氣味合にて幕

○五幕目本舞臺都而大乘寺門前の体此場の筋は當寺の所化四人居て今日は多賀家の法會だと噂をして居るところへ多賀の愛妾お貞の方中老政尾同じく玉笹奥女中腰元大勢出て來りせりふ渡りめい〳〵法事の布施物を出すを住

僧請取り(住)ドレ法會の用意を致さんト門内へ退入る是にて玉笹はじめ奥女中腰元ども〳〵門内へ退入る跡に政尾お貞の方殘り(政)いつぞやよりお部屋さまよは大月さまに絶へてお逢ひ被成れ升せぬか(貞)それゆへみづからいてゝろ苦しう思ひ升(政)さやうにムり升う幸ひ今日い能折からなればあなたのお心をさつしわたくしが首尾を致し置升たわいなア(貞)スリヤそなたが首尾をして大月さまに(政)急度おわわせ申升シテ何かあなた大月さまへお言傳はムり升せぬか(貞)人目を憚りし事ゆへ認め置きし此文を大月さまへト出さを政尾手紙を箱せこへ入れて兩人門内へ退入る此時浪人三人して鳥屋萬助鶯の鳥を入れし籠を持三人よ引ずられ出て來り(三人)コリヤ我〳〵になせ突當つたト喧嘩を仕かける政尾見かゝて中へ退入り三人をなだめる是を聞入れず三人刀を拔政尾に切ッて懸るを政尾扇にてあしらいトゞ三人を追散す此内以前の文を入れし箱せおを落すをしら走玉笹來懸りこれを拾つて門内へ退入る浪人三人は逃あがら件の鳥籠を切るゆへ中の鶯は飛逃ケ仕舞ふ此時法會の初としらせるゆへ政尾ハ門内へ退入る後よ萬助は大事の鶯を逃しあされて居るところへ萬助の娘おひな出て來り萬助の体を見て恟りして親父の介抱をする萬助ハ貧苦の中でよふ〳〵と飼育てた三光といふアノ鶯けふ百兩よ表所へ納めたのしみに仕よふと思つたを逃がして仕舞コリヤどふ仕たらよからふなト歎くもへおひな心をさつし(ひな)いつそ此身をうつてなりとおまへに樂をさせたいはいなアト泣て居るところへ大月獵人門内にて倆ひながら出て來り貳人りをなぐさめ(大)コリヤ其歎は尤あまり不便ゆへ幸ひ今日は殿の法生會なるゆへ百兩金を親子の者へめぐみ遣

はす間心置なく持歸れ(萬)そんなら是をもたくしに有難ふムヨ升る(ひな)せめて此お禮にわわたくしが御率公なりと致し度うムり升る(大)其志しなれば身が屋敷へ何時なりと參れ抱へて遣そふト是よて親子悦び(萬)何れお邸へ參り升るト約束して別れを乞ふて両人這入る藏入後を見送つて居る所へ以前の政尾出て來り(政)大月さま最前お貞さまよりあなたへ送りしお文を預かりーを取り落し升たが申分がムりませぬ此拾ひ人わ槌よ玉笹ト藏人うおづく此件よて道具廻る

○本舞臺都而大乘寺廣間の体此場の筋は中老政尾落せし文を入をし箱せこを尋ねて居るところへ中老玉笹以前拾ひし箱せこを持出て來り(玉)モシ政尾さま是はあなたの品ではムりませぬか(政)ヲヽ是は忝ふムりますト受取中を見て一寸氣をかへ(政)コリヤ大變是なる箱せこへ入れ置し金子五十両が見へませぬが玉笹どのこおたは大膳おお方とやなァト是よりいつもの鏡山のぞふり打よふのせりふわつて玉笹を打すへる爰へ奥女中六人出て玉笹を口〳〵に悪口する玉笹無念の思ひ入政尾急度おつてみな〳〵見得にて幕

○六幕目本舞臺都而筑摩川の体此場の筋は川越人足大勢出て(人足)けふは鍋倉からお歸りの多賀の大領さまが御通行だから錢儲を仕にやあらねへト人足皆〳〵は入る向ふより鳥居又助伴間形り粹又市をつれ高木淺右衛門野田八郎治名島逞八の三人跡より安宅郷右衛門出て來り何れも旅形り(又)旦那の藏人さまに浦和の宿で親子とも命助けられお供となして下さるとは有難ふムり升るト悦ぶと

お〳〵其尾よ付込み(郷)今日此川を渡らせ被成る大領を又助汝恩を思へば水中にて殺して呉りやれト三人して又助に頼む(又)どふして其よふお事が出來升う(郷)汝がいやと申せば是非ない事大事を明せし事なれば又市を殺して呉りやうト又市を三人して人質としていふゆへ又助子の愛に引され是非おく思案をして(又)余義ない事ではあるけれど受合まするでムり升ト又助承知する三人悦び思入して上手へ又市をつれて三人は入る跡よ又助十方にくれて氣をかへて小影へ忍ぶ此時向ふより大領藩士大勢附添へ出て來ると大領は馬にて筑摩川の急流を渡ろふといふを向ふよて藏人是と聞出て來り(大)スリヤ君たとへ御馬術に秀給へど此大河を渡らせらるゝい余りなる御短慮お留まり下され(領)汝何程諫を入れてもりんげん出て再び戻らず口をつぐんで抑へておろふト是にて藏人不興を蒙むる藏人うまくいつたといふこなしにてわざと恐れ入ツて退き上手へ這入る(大領)馬を引ひトいふ是にて揚まくよて馬の轡の音するこのもよふよて此道具廻る

○本舞臺都而筑摩川遠見の体此場の筋は以前の藩士遠見よて子役川を馬にて越る事度々あつてトゝ此道具廻るト向ふ岸の体とある大領馬にて川を越せし体にて馬より喜悦の体藏人を呼出して(領)コリヤ藏人汝が諫言おくば此大河は越されまじ是よつて不興を許し加増致すぞ是を一同祝す件にて幕

○七幕目本舞臺都而鏡山紅葉盛りの体此場の筋は左枝佐渡守家來をつれて紅葉見物よ參り欲より大田大炊連を立つて出て來り(佐)かねて望その猛々の亂をゆるして下さ

れ(小)傳授の間御家來を遠ざけられよト佐渡守家來をのこらず遠ざける(小)猩々亂より國家の亂れ奸賊大月藏人(佐)彼が惡事見出を能手掛りト是より兩人謠によそへて大月が惡斗を見出を相談あす手數を打あがら別を云ふて佐渡守家來をつれて這入る跡に小田大炊月を見ながら(小)兼而藏人が惡事見出さんと酒の無心と偽わつて度々大月が内の樣子を伺がへども今よ証據も取り得ぬしたハテ無念な事だト酒よ醉つたる心にてぶら〳〵這入る爰へ安宅鄉右衛門鎗を持伺ひ出て(鄉)か弥〳〵覗らいし小田大炊後より追欠此津田祐廣にて一ト突よ致して呉れんト此件にて道具廻る

○本舞臺都而鎗山麓の休此場の筋は小田大炊ぶら〳〵と出を鄉右衛門伺ひあがら覗いを定め突ッかけるを小田はやくも身をかわしこれより猩々を舞ひ仕わしらい立廻り有てト〻鄉右衛門の鎗のほ先を切折る是非なく逃て這入る小田件の鎗の穂先を立上てよく〳〵見て(小)正しく大月が求めたる津田祐廣の鎗の穂先ムト考へるこゝしにて此道具廻る

○本舞臺都而大月藏人下屋敷の休此場の筋い烏屋萬助の娘おひゐ大月の妾になつて居る(ひな)斯うして大月さまのお情を受てい居るものゝどふも御本妻のおてるさまへ濟ぬわいなアトふさいで居るところへ大月藏人出て來りいろ〳〵とおひなが笑談あどいふおひなおてるへ濟ぬから是非暇をくれとたのむゆへ(大)さ㊟ど妻へ義理立致すなら明日遣はす是迄の賞として是を遣す間持參致せト服紗よ包みし金百兩を與へる(ひな)是をお賞ひヤまして い猶〳〵心か濟せぬト押返す此時庭外へ深見十藏忍び入り居て(十)入らぬ金おらわしが貰らひ升うトそつと這入る大月おひな怖りする(十)先達て大事な仕事をさせてわづかな金を褒美に下すつたが遣つて仕舞つたゆへ無心よ來升たトいすわるゆへ大月他聞を憚りおひなを奥へ遣ス(大)ソリャ尤おるが今は出來申さぬ(十)イヤ出來ぬとなれバよいいつぞや頼まをし時の此手紙を証據にして出る所で金にするト根强くいふゆへ大月もてゆまし據ろなく(大)さやふ申せバ是非がない此百兩を進上申す替りそれなる手紙を返して貰い升う(十)是い又來る時の金のつるめつたに渡さぬト言ながら金を持暇を告て立歸る此時上み手の障子の内よて久松三五郎伺ひ居て大月と顔を見合す三五郎障子をぱる(大)大事を仕つた久松なれば思案をめぐらしどふでも身方よ附ねバならず殊よ大炊めを今

宵郷右衛門が仕留めに行きしが是ぞ我運命の定るところト思案を仕て居るところへ郷右衛門出て來り(大)郷右衛門首尾ハ(郷)されバ不首尾でムる鏡山みて小田大炊討もらしあまつさへ鎗の穂先を切取られ無念ながらも立歸つてムるト此時高木野田の両人又助と又市を引ずり出て來り引ゼへる(郷)コリヤ又助汝恩を仇にて返しよくも筑麻川にて大事を仕損せし不屈者めが(又)御頭主さまを助ケ申せしはヤつぱり大月さまのお爲でムり升るト其實急のお召しでムり升るト知らせるゆへ大月出仕をやうトに意見をするをみな〳〵聞入ぎ怒つて又助又市をさいなみトゞ大月又助を殺す郷右衛門は又市を殺す(大)一ッの恨みハはらせしが彼の久松三五郎を味方に附るかたゞし殺すか致さねば枕が高ム寐られヤさぬト此時三五郎出て來り(三)イヤ御心配ム及バぬ久松三五郎お味方ヤすト証據を立つて一味するゆへ〳〵悦こぶ折からおてる出て來り夫トの野心を諫めいろ〳〵意見をすれど大月聴入れぬゆへおてるトゞ懐劍を抜て自害をするおひな此の体を聽いろ〳〵介抱をする爰へ侍出て(侍)只今御殿よりお召しでムり升るト知らせるゆへ大月出仕をやうトいふみな〳〵慌ひに慌む件みて幕

○八幕目本舞臺都而多賀家白洲の体此場の筋は奸臣どもを詮議にて左枝佐渡守小田大炊両人立合詮議を遂る爰へ高木浅右衛門野田八郎治を呼出し吟味そるに両人は據ろなく謀叛の事共を一〳〵白狀する是より安宅郷右衛門を呼出し調ぶれども白狀せぬゆへ假り牢入りを命じ又大月瀧人を呼出し段〳〵詮議すれど大月辯舌を巧みにしていろ〳〵言拔け罪ム落ちぬを理非明白なる大炊の一言ムて大月郷右衛門罪に伏し白狀なす爰へ敢尾も白狀せしと注進ある是にて悪を懲らし善を賞し忠死の者の跡目をたてまた又助の身よりも腰越にあるを取立都て悪人亡び善人榮へ多賀家の萬歳を稱す件にて幕

○大詰九幕目本舞臺都て三上山麓の体此場の筋は前幕のおひな在所娘の拵らへにて風呂敷へ包みし重箱と偽利を提て居るを足輕四人見て(足)科人大月が籠牢見張の我々それム怪しひ女めト咎める(ひな)イヱ〳〵怪しひ者ではムりませぬ私は麓の佐久左衛門といふ者の娘親類ム佛事あつて親子呼れて戻り道ム迷つて參りましたが狐に化されしかとゝさんを見失なひ難義致しまそるゆへどふぞあなた不便と思し召し私を宅迄送つて下さいましその

替り此精進物とお酒をあがつて下さい(足)酒い法度だが目の前よあつちやたまらねへそんならもらつてもいゝのか(ひな)どうぞあがつて下され(足)それじや頂戴と出かけよふト件の酒を足輕四人にてさな〳〵醉ッて眠つて仕舞ひおひあい是を見濟ましうまくいつたと仕打して呼子の笛を出して吹と鳥屋万助頭巾を冠り鳥さしの形りにてもち竿を持出て來りおひなと顔を見合せ(万)首尾よくいつたか(ひな)ハイ藥の利目は不思義だねへ(万)御恩を旦那さまへ返そうと工そし眠り藥酒よ入れ足輕共へ用ひた

利目(ひな)張番の者をたばかり首尾よくいつた上からそすこしもはやく旦那さまへ御恩返しに御生害をおすゝめヤさん(萬)是より直に絶頂の籠牢へ(ひな)サアムんせト兩人して四人の足輕を谷へ突落し兩人ハ山の籠牢へ登らふと上の手へ這入ると引道具前の番小家藪壘を引て取る山幕を切ッて落す

○本舞臺都而三上山絶頂籠牢の体此場の筋ハ大月籠牢の内に先非を悔ひ歎息をして居るところへ以前の萬助おひあ出て來り(萬)惱よ大月の旦那さまは此籠牢の内よ(ひな)情ない事じやあアト萬助涙ながら籠牢よ小拐を結び附牢の内へ差入れ(萬)モシ旦那さま御自害をお進め申は逆乍ら(ひな)すこしもはやく御自殺あつて此世の苦限お通れ被成れませト大月小拐を取ッて(大)見張の者のその外は絶へて人の入らざるにその方ハ何者あるぞ(萬)ハイ私親子はあなたさまよ御恩を受し鳥屋萬助(ひな)娘のひあで御座い升る(大)藥越しの月よさだかあら祢ど萬助親子でありしかわづかあ恩を仇にせず鳥も通わぬ此所へ尋祢來り我に生害進むる志ざし過分に思ふぞ大月藏人今更

後悔致したわヘト俱に悲歎の涙に呉れ咽ぶ此時螺の遠音聞ゆるゆへ(大)今鳴る螺の音わその方等が是へ來るを洩聞追手よ來たるも斗らねば二人ははやく此場を落よ目に懸らば大事なるぞ(萬)せめてあなたの御先途を(雛)見屆ケとふムり升る(大)エヽ未練なやつめがト叱り附る万助おひな余義なく湖の中へ忍ぶ此内牢の内よて大月は自殺して苦痛の体聞ゆる爰へ裏手の嶮岨を越番人四人出て來り大月が苦痛を聞付牢の錠前を明て覗き見る内より大月血紅よりよろぼひ乍出て來り四人を相手よ立廻る萬助おひない是を見て涙ながらよ思ひとのこして向ふへ逃入る又大月ハ立廻つて番人を一人組數乗懸つて我咽へ小柄を突立引廻を此件道具居所替りと成るこれより淨瑠璃狂言へつゞく

明治十八年九月廿五日御屆

（定價金八錢）

蠣殼町三丁目十二番地
編輯兼出版人　保坂由兵衛